

# 自己記述にあらわれた自己態度の安定性\*

古 沢 厚 子  
星 野 命

## 目 次

- I 研究の目的
- II 研究の問題点
  - 1 自己態度の定義
  - 2 自己態度の安定性
  - 3 自己態度の研究法
  - 4 Twenty Statements Test (20答法)
- III 実 験
  - 1 仮 説
  - 2 方 法
  - 3 結 果
  - 4 考 察
- IV 結語及び要約
- 文 献
- 付 20答法用紙見本
- 英文抄録

## I 研究の目的

ひとの心的活動あるいは行動は、ひととそれを取りまく環境との相互作用として行なわれている。ひとはそのおかれた環境のみによっても、また単純な衝動のみによって行動をおこすものでなく、環境すなわちまわりの状況とひとの客観的条件と、さらに、ひとの能動的主体的状況が行動に先立つ要因となっている。自我および自己 (self) は、この人間行動の主体的要因についての考察からでてきたひとつの問題である。

自我については比較的古くから哲学の分野でとり扱われてはいたが、心

---

\* この研究は昭和36年度警察庁委託研究費による「少年の自己態度分析法による非行性の研究」の成果の一部である。

理学の大きな関心のひとつとなったのは、ごく最近のことである。19世紀のおわりごろ、James, Titchener, Hall, McDougall, Baldwin などは、それぞれの立場から自我または自己の概念の必要を認めていたが、心理学の大勢を動かすに至らず、1940年代になって急速に研究がすすめられ、理論化が試みられるようになった。しかし自我および自己が何を意味するかはすでにその研究の当初から問題であった。William James (1895) は the self を, the I と the me とに区別して考えることによって彼の自我論を展開したが、この概念規定にはその後、長い間、混乱があった。現在では一般に心理学の対象とすることのできる自己 (self) は客体としての self (observed あるいは perceived self) であるとされている。それに対して主体である self は、概念的構成物として考えることはできるが、認識の対象となりえず、研究の対象となりうる self とは区別した方がよいと考えられている。そして、主体としての self は「自我 (ego)」という用語をもって一般には区別している。(19. 39)。

自己についての研究は最近の20年間に盛んになってきたが、それは主として臨床的経験にもとづいて立てられた適応理論を中心として発展してきている (Raimy, 1948, 34; Rogers, 1951, 35; Bills, Vance & McLean, 1951, 2. など)。わが国でも近年特に自己(あるいは自己概念)と適応の問題が注目されるようになってきた。(この点については加藤(1961, 18) のくわしい展望と、長島の研究 (33) があるが、ここでは詳述をさける。こうした研究はそのよってきた問題の性質上、自己の評価的側面を重視し、これを適応の力動性に関係づけている。ある個人のなかの評価的主観的な自己について、いくつかの次元を仮定し、これらの次元の全体的な布置の状態が自己構造、あるいは自己概念と呼ばれるものであると考えている。

この小論では、従来の自己についての見かたのほかに、その形成過程を考慮して、すなわち、社会の中にある個人の自己が、その社会の影響を受けて形成されることに注目して、社会的枠組の内在化したものとしての自己の側面をもとりあげていきたい。このような自己の側面は、感情的

評価的側面と同じように重要なものであり、さらに、それらの側面を形成するさいの基盤となっているものと考えられる。この意味での自己は、従って、一時的なものでなく、持続するものであり、ひとの<sup>ま</sup>身について、そのひとから容易にはなれることのできないものと考えられる。ここではできるだけ自由な状況で書くことを求めたひとびとの自己記述から、自己態度の各側面を分析し、その安定性を検討することにする。

## II 研究の問題点

### 1 自己態度の定義

この研究で扱われている「自己態度 (self-attitudes)」とは、今までの研究において「自己観」「自己像」「自己概念」「自己意識」などと表現されてきた概念よりは少し広義で、個人が認知し感じ評価する自己の所有、属性のすべてをさすものである。すなわち、**個人の社会的地位・役割、その個人に属する身体・能力・性格特性、興味およびその対象に対する自身の認知や評価などを通じて推定される自身への構え**をいう。したがって単に自身に対する感情的評価的側面だけではなく、さらに客観的事実に即した認知的側面、たとえば、社会的役割や社会的集団へ自身を同一化し、帰属させて眺めている側面をも含めて考える。

この見かたはすでに早くから C. H. Cooley (1902, 7) や G. H. Mead (1934, 31) などの社会学者によって指摘されていたものであるが、その主眼点は自己の発達の過程における社会的決定因を考慮したところにあって、要約すれば次のようなものである (31, 34)。

客体としての自己の発達は、他の人々が自分に示した態度を自分の行動体系にうけ入れ内面化することによる。他の人々の示す態度はその社会における役割に従っているので、ひとは他人の役割を通して自己を認識し、他人の役割をすることによって自己を形成していくことになる。Mead はこの過程に注目してから自己を「一般化された他者 (generalized others) の内在化」定義しているが、彼によれば、自己は主としてその社会におけ

る行動の型・態度・価値・評価の体系が内面化したものであり、これが逆個人の行動を規制し一定の枠組を与えるものとなると考える。G. Murphy (1947, 32), K. Young (1947, 44), T. M. Newcomb (1950, 34), T. R. Sarbin (1952, 38, 39) らは、いずれもこの考えをうけ継いで、社会的相互作用をパーソナリティ形成の主要な要因としている。

この立場からの自己の見かたには、たしかに自己のある一面をよく説明しているところがある。たとえ自己の全体が、この社会的相互作用説のみで説明しきれぬものとは考えられないにしても、他人の役割の習得という形で、社会的集団により self が意味づけられているとすると、行動を内部から規制するものとしての自己態度の中には、実在する社会的集団あるいはその役割が非常に大きな重みをもってくることが示唆される。

この研究では、以上の観点から自己態度を操作的には次のように定義する。

**「自己態度とは、個人が『私』という代名詞によってあらわすことのできる自分、あるいは自分のものと考えているものに対してもっている態度の全体である。」**

## 2 自己態度の安定性

他人との社会的相互作用により、形成された自己態度は、その後どのような機能をもつであろうか。自己態度の機能のひとつは、ある具体的事態において、個人がどのように上手に行動を起すことができるか、その状況を認知し、つかみとる準拠枠 (frame of reference) となることである。すなわち、自分と自分を取りまく環境との関係を決定し、統制する働きをもつものとして考えられる。これと同時に、その行動自体は、いつでも自己を保持し、防衛し、さらには高揚するようにと方向づけられる。一度自己態度ができると、多くのばあいは、その体制を維持しようとする方向に進んでいく。もしも自己態度にとって脅威となるような状況に接すると、自己態度を守るという目的のために状況の認知に選択が働くか、あるいは自己態度が修正され再編成される。時には、分裂したり、くずれ去ったり

することもある。

ここで自己態度の安定性ということばについていくつかの概念を区別しておきたい。従来の研究で扱われてきた概念を分けてみると次のようないくつかを考えることができる。

- a. 自己態度の内部構造の一貫性 (Lecky, 1945, 24 ; Rogers & Dymond, 1954, 37 ; Brownfain, 1952, 3)
- b. 多くの個人に一貫してみられる自己態度の一般的傾向 (Bugental, 1955, 5)
- c. ある時間の経過に伴う変化の程度の少なさ (Taylor, 1955, 41 ; Engel, 1959, 9 ; 福島, 村山, 1958, 10, ; Kuhn, 25, )

行動に対する自己態度の力動的な機能を重視したのは Lecky であるが、彼は1930年代にその臨床的知見に基いて自己の一貫性 (self-consistency) の理論を提起している。彼の考えかたは当時のアメリカ心理学界では問題にされなかったといわれ、彼の意見も死後公けにされたものである (26, p. 1)。彼の理論の中心は精神 (the mind) という概念であり、「精神の中心、あるいは核は自己自身についての個人の観念、あるいは概念 (26, p. 119)」であるとする。そしてもしもある新しい観念があった場合今ここにそれがすでにその体系に現われている観念と、特に自己自身についての個人の概念と一致しているように思われるならば、それは受け入れられ、容易に同化される。しかしそれが一致していないと思われる観念ならば個性を維持するために、抵抗に会い拒否されると考える。彼のこのような理論とは別に、C. Rogers が、心理療法の立場から自己に対する知覚の変化を問題にしているが Lecky と一脈通ずるものがあるようである。彼は「行動を理解する最も有効な方法は、その個人のもっている内部的枠組すなわち自己構造 (この認知されたものを自己概念として把握する) に従って理解することである」と考え、独得の人格理論及び治療理論をうち立てている。一方、Brownfain は、自己のいくつかの側面の間の次元が適応に関係するものと考え、積極的自己評価と消極的自己評価の間の差をもっ

て自己態度の安定性を示すものとした。彼の考え方はその後、いくつかの研究で追試されている (Cowen, 1954, 1956 ; 丹羽, 1954, など)

Bugental は自己態度の一般的傾向をグループとしてみると、きわめて斉一性のある型が示されていることを見出している。彼は “Who are you?” という質問を出して、それに対する反応を分析した結果自己に対する態度の中に社会的な側面が一貫して見出されることを発表している。

以上 2・3 の例にみられるような自己態度の安定性は、ある一定の時点における個人内部の構造、あるいはグループ全体の中にみられる個人の傾向をとり扱っている。これとは別に問題になってくるのが、自己態度の時間的変容である。この問題は特に Rogers らが治療過程における自己概念の変容を問題にしたところから注目されてきたものである。自己態度は果して変りうるものかどうか、またもしも変るものだとすれば、どのような要因で変るだろうか。そのひとつとしてとり上げられたのが、時間の経過に伴う自然的变化である。Taylor (1955, 41), および Engel (1959, 9) は、自己の評価的側面について時間を隔てての 2 度のテストの結果を、比較検討したがその間には一定の傾向のある変化をみとめている。それはいずれも自己に対しての肯定的態度は安定しており、否定的態度も肯定に向うということ、また肯定的な自己態度をもっているほど、全体としての自己も安定していることなどである。

この研究でいう自己態度の安定性とは、自己態度の構造的な側面を考えたとき、ある側面がきわめて一般的な傾向として表われ、それが時間の経過にも拘らず、持続される、という意味である。このことは自己態度を社会的相互作用の結果として形成された自分への構えと見てとらえる以上、自己態度の社会的枠組に繋留する部分は、発達の上から比較的堅く基礎づけられ、その他の側面を形成していく地盤となっていると考えられることによる。このような地盤は当然、時間の経過だけでは、それ程大きく変動するものでなく、もしも変動があらわれるばあいにはそれは新たな社会的相互作用による変化とみなされよう。(Manis, 1955, 27 ; Grater, 1959,

11)。

### 3 自己態度の研究方法

自己態度を研究するさいには、そこで対象とされる自身があくまでも自己によって認知されたものであるという観点に立つから、個人の内部的な枠組でとらえることが必要になってくる。自己態度のとらえかたとして従来いろいろな心理的学方法が試みられてきたとともに、それぞれの観点からその妥当性を明らかにしようとする努力がなされてきている (Wylie, 1961, 42)。

そのひとつは、自己に対する見かたを現象的自己として、自分についての評価的側面をとらえようとしたものである。自己満足 (self-satisfaction)、自己受容 (self-acceptance) 自尊感情 (self-esteem)、自己好意性 (self-favorability) という面で、操作的には現実の自己 (real self) とそうありたいと思っている自己 (ideal self) の一致度あるいは差違をもって、説明している。たとえば、Q-分類の技術は、自己についてのいくつかの項目を自己のある側面について、もっとも自分に当てはまるものから、自分らしくないものにまで強制分類させ、自己の諸側面の間の対応関係を相関係数の形で表わしている (Butler and Haigh, 1954, 6)。このほか自己に関係のある形容詞のリストをチェックさせる方法や、人格目録法のような形で自分の特性を表わす叙述を選ばせる方法、また、評定尺度の形で、評定させる方法などがある (Bills, et al., 1951-4, 2 ; Brownfain, 1952, 3, etc.)。以上の方法はいずれも心理測定法の技術を用いて自己態度を数量的に扱えるような形でとらえようと努力してきたものであるが、研究者がはじめに自己態度の枠組を構成しておいて、それに対して反応を求めるといった点で難点がある。というのは、項目に表われている以外の自己態度については、これらの研究からは何の手がかりも得られないからである。

この方法に対して歴史的には古く、またよく用いられてきたのが、作文法・自叙伝法・面接法などである。これらの方法は個人自身のことばによって、表現されるところから、個人のその個人の内面が見ているままのす

がたで表現される長所と同時に、その陳叙が非常に多岐にわたるという短所をもっている。そこで次には、自由な状況の中で、自身について自由に表現する機会を与えながら、しかもある程度、構成された枠組を仮定して分析の客観性を保つことが必要になってくる。Bugental と Zelen による W-A-Y 技法 (1950, 4) と Kuhn と McPartland の Twenty Statements Test (1954, 22) はこの自由記述法の長所をいかし、かつその短所を補うものとして注目されてよいものであろう。

#### 4 Twenty Statements Test (20答法)

この研究で用いられる20答法は1953年以来アメリカのアイオワ州立大学でパーソナリティ研究のため利用されている方法である。この方法の特徴は、外部からの最小の刺激によって、自発的に自己について記述させ、それがもっともよくその個人の自己態度を表明していると考えられる点にある。この方法は自由作文法とあらかじめ構成された自己態度尺度との中間に位置するものと考えられる。理論的背景としては Mead らの自己に対する見方 (社会的相互作用説) をふまえて、態度としての自己をとらえることを目的としている。Kuhn らは予備的研究のすえ、“Who am I?” という問に対して20通りの答を自由に記述させる方法を創案したのであるが、彼らを実証した諸点は次の2点に要約される (22)。

1) 社会的構造あるいは集団に繋留された自己についての記述 (consensual statements) にあらわれた自己態度は、個人の要求水準、信念、能力、あるいは性格の評価などに基づく記述、あるいは非常に主観的な記述 (sub-consensual or non-consensual statements) によるものに比べて自己態度の本質的な面を示している。

2) Consensual および sub-consensual な記述の相対的な種類あるいは量はかなり広い拡がりや差違を示すが、これは個人がいかなる集団に属するかによって規定されている自己態度の表現とみることができる。

Consensual statements のもつ意味について Kuhn らは、いくつかの批判を考慮に入れつつも、これらの記述の出現の順序が Guttman による



「尺度化可能なもの」の条件を満足しているところから、妥当なものと考えている。すなわち、最少の教示のもとで自発的に表出されるような自己についての記述は、質問を繰り返し深く考えさせなくては表れてこないような自己についての記述よりも、より重要であると考えてよいというのである。(Newcomb, 34, p. 151.)。この容易に表現される自己についての記述は大部分 Linton の5つの社会的標識への identity であるとみなされ、そこから自己に対するの態度はより大きく社会的集団に準拠しているとみることができる。

Kuhn らはこの方法によって以上の点をさらにたしかめるために宗教的集団への参加度を目安にして、社会的繋留の強さのちがいによって自己態度が変わるかどうかの分析を行っている。その結果、人々は主観的に同一化している集団との関連において自己を構成し、態度を方向づけていることをたしかめ、客観的な社会的地位や役割が内在化されていることを証明した。その後、さらにこの方法の妥当性を検証するために1185名の被験者の記述を分析し、社会的記述の数が年令と共に変化すること、性によって社会的集団への同一化にちがいのあること、集団への所属年数、集団の種類によってちがいの起こることをたしかめている(1960, 23)。最近では Kuhn は自己態度の変化を考えるさいに、なにがその変化に影響を与えているかを、単に社会的枠組による叙述にかぎらず全記述について分析を行い、さらに自己態度のあり方を適応の問題に関係づける試みをしている(5)。

この方法を用いたその他の研究としては Grossack (1960, 12)が Kuhn らの示唆に基づいて臨床に利用し、精神病患者の反応の型を見出そうとしている。また McPartland, Cumming, Garretson (1961, 30)らは分析の方法を少し変形し、同じく精神病院において患者の行動の pattern と自己態度の pattern を関係づけている。ここでも社会的枠組への自己の繋留のしかたやその程度が社会的行動の方向と一致していることを見出している。我が国では、星野を中心に正常人にこの方法を適用したばあいの回答類型

の検討を行ってきており（1958, 13, 14；1961, 15；1962, 16, 1），同様の結果を得ている。

### III 実 験

この実験はすでにのべてきたような研究の意図に基いて、次のような実験仮説を検証しようとしたものである。

#### 1 仮 説

a. 個人が比較的自由に自己についての態度を記述することを求められたばあい、その回答においては、自己についての感情的評価的叙述よりも、客観的に証明可能な、社会的集団や役割に結びついた叙述が先行し、この叙述の出現には高い再現性がある。

b. この法則性は一定の時間を経過しても、再び自己についての記述を求めた場合には、同様にみとめられる。

c. 社会的集団や役割に結びついた反応特徴は、一定期間経過しても、変化せず安定している。

#### 2 方 法

**対象：**東京都下私立高等学校1年生48名および都下の国立大学2・3年生36名。高校生のばあい、2回のテストを施行した高校生において分析可能な資料を提供したものは男子17名、女子18名、計35名であった。年令は15才から17才にまで分布し、16才がもっとも多い。大学生では資料を提供したものは男子12名、女子17名、計29名である。年令は20才から26才にまでわたっているが、20歳と21歳が大多数である。

**手続：**1961年10月から1962年2月までの間に各グループに、一定の期間において2回20答法が施行され、回答が求められた。期間ははじめ3カ月を予定したが、実際には種々の事情から高校生では100日、大学生では70日の期間において実施された。施行には所定の記入用紙（本稿末尾参照）と20答法用の手引を用いた。用紙には別記のとおり教示が書かれており、その下に「私は誰だろうか」という問が与えられている。再テストの時には

次のような指示が与えられた。「このクラスの皆さんの中には、前に一度書いたことのある人が多いと思いますが、これからもう一度、ご協力下さるようお願いいたします。前に書いたときのことを思い出さなくても結構です。はじめてこれをするような気持で前に書いたことにとらわれずに書いてください」といって用紙の指示を読む。

施行に要した時間はそれぞれ50分である。

**整理の方法：**集められた資料を整理するに当たって次の諸点が考慮された。

a. 高校生・大学生は別々に整理集計する。被験者の年令、および2回のテストにまたがる期間のちがいがその主な理由である。

b. すべての自己叙述は、標準的手続に従って内容分類を行う。内容分類のカテゴリーは、国際基督教大学教育研究所で Kuhn の手続にならって作成したものである。(註1)

#### 内容分類カテゴリー

#### I 社会的記述項目 (consensual な反応と呼ばれる)

社会的集団や役割に結びついてしかも帰属が客観的に証明できるもの。例えば、性、職業、年令など。

#### II 自己についての記述項目 (sub-consensual な反応)

個人によってよりよく知られている自己の能力、性格特性などの記述、感情、評価、その個人にのみあてはまる経験など。

#### III 外的事象への関心、欲求、希望についての叙述項目 (sub-consensual な反応)

外的事物、あるいは事象に対する興味や関心や評価判断など。

次に、この分類にしたがって全記述を subsensual なものか non-consensual なものかに2大別する。

その上で、Locus Score (集団準拠指数) を求める。Locus Score

---

註1 20答法の分析方法としては、ここで用いられたものところが方法もいくつか考えられている (Kuhn, 1962, 24. McPartland, 1959, 28) が、筆者らもさらに検討をつづけている。

とは consensual な叙述から sub-consensual な叙述に移行する点によって示される数をいう。たとえば、20答全部を社会的集団や役割に結びつけるような記述をもって見たしているようなばあいの locus score は20とされる。また逆にはじめから sub-consensual な記述に終始するばあいは0とされる。集団準拠の程度を示すものとして consensual 反応のすべてをとらずに consensual 反応と sub-consensual 反応の移行点をとるのは次の理由による。すなわち consensual 反応の総数の中には sub-consensual 反応の系列の中に偶然的に入りこんだものも含まれている。それらが果して集団帰属の指標としてどれだけの意味をもっているかを考えるとき、むしろそれらの偶然性を排除した locus score を用いる方が妥当と思われるからである。

c. Locus Score の集団準拠尺度としての、再現性係数 (Coefficient of reproducibility; Rep.) を算出する。この係数は、

$$\text{Rep.} = 1 - \frac{\text{全誤反応数}}{\text{全反応数}}$$

$$\text{あるいは } \text{Rep} = 1 - \frac{\text{全誤反応数}}{\text{項目数} \times \text{被験者数}}$$

で求められる (42, p. 319.)。

d. 2回のテストの結果を各内容分類で比較する。

### 3 結 果

#### a Consensual 反応の出現順位

社会的叙述項目の反応順位によってきまる locus score は、第1回テストにおいて高校生では平均して4.47、大学生では3.78となっている。locus score の分布の偏りを考慮しても20答中、最初の3ないし5項目がいずれも社会的項目で始まっていることが分る。表1は第1回テスト、第2回テストの locus score の平均とその散布度を示している。テストと再テストの平均の差は高校生、大学生共に有意なものではない。分布の偏りを考えて対応する2つの中央値の差の検定をした結果においても、同じく差はみとめられなかった (17, p. 190-1)。図1および2は locus score の分

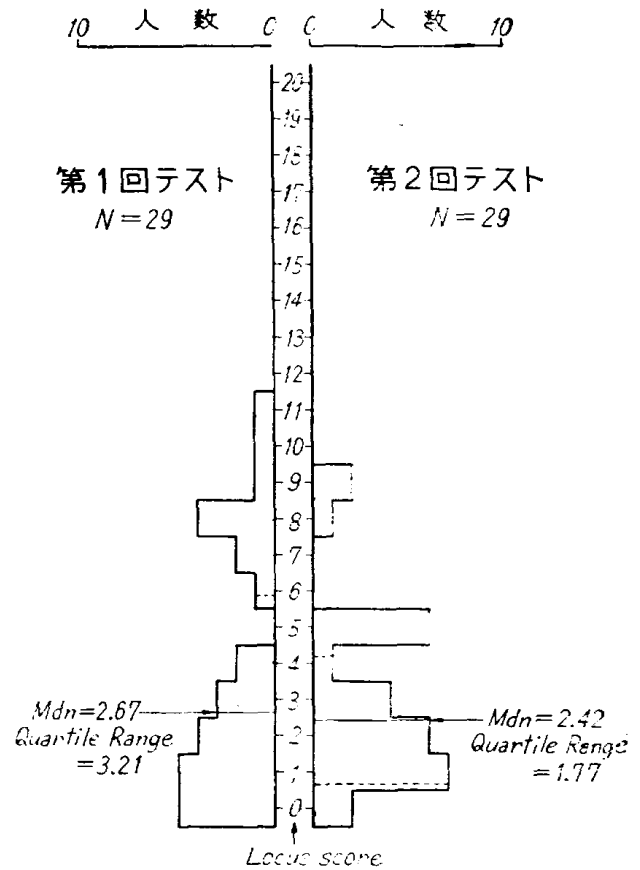
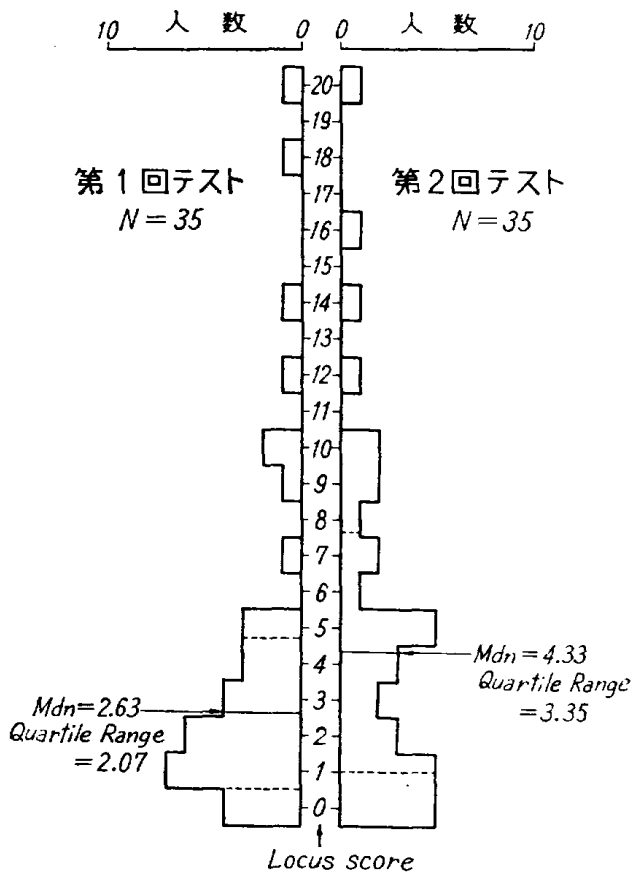
表1. 2回のテストにおける locus score (集団準拠指数) の変化

Locus Score	高 校 生 N=35		大 学 生 N=29	
	第1回テスト	第2回テスト	第1回テスト	第2回テスト
平 均	4.47	5.16	3.78	3.26
標 準 偏 差	4.58	3.80	3.44	2.56
得 点 の 範 囲	0—20	0—20	0—11	0—9

平均の差の  
検定
 $t=1.05$   
 $d.f.=34$   
 有意差なし

 $t=.73$   
 $d.f.=28$   
 有意差なし

図1 高校生における locus score の分布 図2 大学生における locus score の分布



布を示すものである。

この社会的項目の先顕性は20答中の各1項目を「与えられた質問項目」とみなし、consensualな叙述を「正答」とするならば、Guttman scaleの考え方によって数量的に表わすことができる(22)。locus scoreをもってひとつの社会的枠組への繫留程度のscaleとして、その再現性係数を

示したのが表2および表3である。ほとんどすべての scale type (locus score によってきめられる) が.85ないし.90の係数を示している。(註2)

表2 高校生における locus score による scale type とその再現性係数

Scale Type	第 1 回				第 2 回			
	人数	全反応数	誤反応数	再現性係数	人数	全反応数	誤反応数	再現性係数
20	1	20	1	.950	1	20	1	.950
19		20	4					
18	1			.800				
17								
16					1	20	3	.850
15								
14	1	20	6	.700	1	20	3	.850
13								
12	1	20	4	.800	1	20	3	.850
11								
10	2	40	5	.875	2	40	5	.875
9	1	20	2	.900	2	40	5	.875
8					1	20	1	.950
7	1	20	5	.750	2	40	4	.900
6					1	20	1	.950
5	3	60	7	.883	5	100	17	.830
4	3	60	7	.883	3	60	11	.817
3	4	80	5	.937	2	40	8	.800
2	6	120	18	.850	3	60	3	.950
1	7	140	10	.929	5	100	11	.890
0	4	80	4	.950	5	100	9	.910
	35	700	78	.889	35	700	85	.879

## 2 反応の内容分類

内容分類に基づいて、各カテゴリーにどの位の人が反応しているかを示すものが表4である。

註2 Kuhn らの結果では、151名の被験者の反応から計算された再現性係数は.903である。

表3 大学生における locus score による scale type とその再現性係数

Scale type	第 1 回				第 2 回			
	人数	全反応数	誤反応数	再現性係数	人数	全反応数	誤反応数	再現性係数
11	1	20	5	.750				
10	1	20	1	.950				
9	1	20	3	.850	2	40	11	.725
8	4	80	6	.925	1	20	5	.750
7	2	40	5	.875				
6	1	20	2	.900				
5					6	120	8	.937
4	2	40	3	.925	1	20	0	1.000
3	3	60	3	.950	4	80	2	.975
2	4	80	3	.962	6	120	6	.950
1	5	100	5	.995	7	140	7	.950
0	5	100	1	.999	2	40	2	.950
	29	580	37	.936	29	580	41	.929

高校生、大学生ともに似たような反応の傾向を示している。第1回テストで大学生は家族関係や身体的特徴、自分でそうなりたいと思っている性格の無為休息への欲求、談話討論への関心の表明が大学生で多く、高校生ではそれに対して自己の所属する民族・人種および「人間」、人間の機能、単位としての自分について表明が多かった。第2回のテストでは、第1回のテストと殆ど同じような傾向を示したが、大学生では自分の性格についての叙述が多く、なりたい性格や、無為休息への欲求、談話や討論、勉学や仕事への関心が多い。高校生は第1回と同様民族・人種、および動物・生物としての自分を表明したものが多かった。このことからこの高校生のグループでは自分をより包括的な社会的枠組の中に位置づけ、大学生ではむしろ直接的な社会的枠組への位置づけをしていることが明らかになった。

第1回テストと第2回テストとの間に差のみられたカテゴリーは大学生

にはひとつもなく、内容を問題にするかぎりでは、時間的経過にかかわりなく叙述に一定の傾向がみとめられる。高校生では余暇活動についての反応に差がみとめられたにすぎない。

### C 2回のテストの間の相関

Locus score について2回のテストの間の相関関係は、偏差積率相関係数で高校生  $r=.593$ 、大学生  $r=.328$  であり、いずれも相関がないとする仮説は棄却される。すなわち両グループとも、第1回テストから得た locus score と第2回テストから得たそれとの間には、非常に強い関係があるとはいえないが、予測しうるだけの関係が見出され、各グループの社会的枠組への繫留程度には一定の傾向があるとみられる。

表4 内容分類カテゴリー別 反応者数およびその百分率

Category		高 校 生 N=35				大 学 生 N=29			
		第1回テスト		第2回テスト		第1回テスト		第2回テスト	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
社 会 的 記 述 項 目	性	17	48.5	18	51.5 <sup>+</sup>	17	58.6	22	75.9 <sup>+</sup>
	学 生・職 業	24	68.5	25	71.4	20	69.0	21	72.4
	年 令	10	28.6	11	31.4	12	41.4	11	38.0
	子どもおとな	4	11.4	5	14.3	1	3.5	1	3.5
	家 族 関 係	13	37.2 <sup>+</sup>	12	34.3	19	65.5 <sup>+</sup>	14	48.3
	住居・出身地	10	28.6	14	40.0	14	48.3	10	34.5
	グ ル ー プ	9	25.7	6	17.1	4	13.8	1	3.5
	宗 教	0	0.0	0	0.0	1	3.5	2	6.9
	地 位・階 級	2	5.7	2	5.7	3	10.3	1	3.5
	民 族・人 種	10	28.6 <sup>++</sup>	13	37.2 <sup>++</sup>	1	3.5 <sup>++</sup>	2	6.9 <sup>++</sup>
	時 代 性	1	2.9	2	5.7	0	0.0	0	0.0
	人 間	18	51.5 <sup>+</sup>	14	40.0	6	20.7 <sup>+</sup>	12	41.4
目	人間の機能	6	17.1 <sup>+</sup>	3	8.5	0	0.0 <sup>+</sup>	0	0.0
	地 球 人	4	11.4	7	20.0	2	6.9	2	6.9



自己についての記述項目	動物・生物	8	22.8	9	25.7 <sup>+</sup>	2	6.9	1	3.5 <sup>+</sup>
	その他	4	11.4	3	8.5	1	3.5	0	0.0
	単一位	7	20.0 <sup>+</sup>	6	17.1	0	0.0 <sup>+</sup>	0	0.0
	氏名	4	11.4	1	5.7	8	27.6	5	17.2
	身体の叙述	9	25.7 <sup>+</sup>	15	42.8	15	51.7 <sup>+</sup>	18	62.1
	技能・知能	11	31.4	9	25.7	13	44.8	10	34.5
	特性・態度	28	80.0	28	80.0	28	96.5	26	89.6
	なりたい性格	9	25.7 <sup>+</sup>	12	34.3 <sup>+</sup>	15	51.7 <sup>+</sup>	18	62.1 <sup>+</sup>
	その他(日常経験を含む)	25	71.4	21	60.0	14	48.3	19	65.5
	無為・休息	2	5.7 <sup>+</sup>	3	8.5 <sup>+</sup>	8	27.6 <sup>+</sup>	8	27.6 <sup>+</sup>
外的事象への関心・欲求・希望についての記述項目	飲食・喫煙	10	28.6	11	31.4	7	24.2	5	17.2
	服飾・化粧	4	11.4	4	11.4	3	10.3	1	3.5
	談話・討論	0	0.0 <sup>++</sup>	0	0.0 <sup>++</sup>	7	24.2 <sup>++</sup>	5	17.2 <sup>++</sup>
	交友親和	15	42.8	15	42.8	15	51.7	17	58.6
	異性交友	6	17.1	6	17.1	3	10.3	6	20.7
	家族関係	10	28.6	7	20.0	12	41.4	11	38.0
	養育・援助	1	2.9	0	0.0	0	0.0	1	3.5
	旅行・冒険	16	45.6	16	45.6	14	48.2	19	65.5
	遊び一般	4	11.4	6	17.1	4	13.8	3	10.3
	見物鑑賞	15	42.8	13	37.2	14	48.2	12	41.4
	余暇活動	21	60.0 <sup>*</sup>	14	40.0 <sup>*</sup>	20	69.0	12	41.4
	勉学・仕事	17	48.5	20	57.1 <sup>+</sup>	20	69.0	24	82.8 <sup>+</sup>
	獲得・達成	3	8.5	1	2.9	3	10.3	2	6.9
	金 銭	2	5.7	2	5.7	1	3.5	2	6.9
	大学・学校	4	11.4	4	11.4	2	6.9	4	13.8
	人間・子ども	1	2.9	2	5.7	3	10.3	5	17.2
	動物・植物	4	11.4	4	11.4	2	6.9	3	10.3
	抽象物	3	8.5	5	14.3	3	10.3	6	20.7
	事物	2	5.7	4	11.4	1	3.5	0	0.0
	神・宗教	0	0.0	1	2.9	2	6.9	4	13.8
	その他	3	8.5	4	11.4	3	10.3	7	24.2

\* 第1回テストと第2回テストの間に5%水準で有意差のあるもの

+ 高校生と大学生の間に5%水準で有意差のあるもの

++ 高校生と大学生の間に1%水準で有意差のあるもの

#### D 記述の一致度

第1回テストと第2回テストの結果を個人別に比較して、同一個人の記述

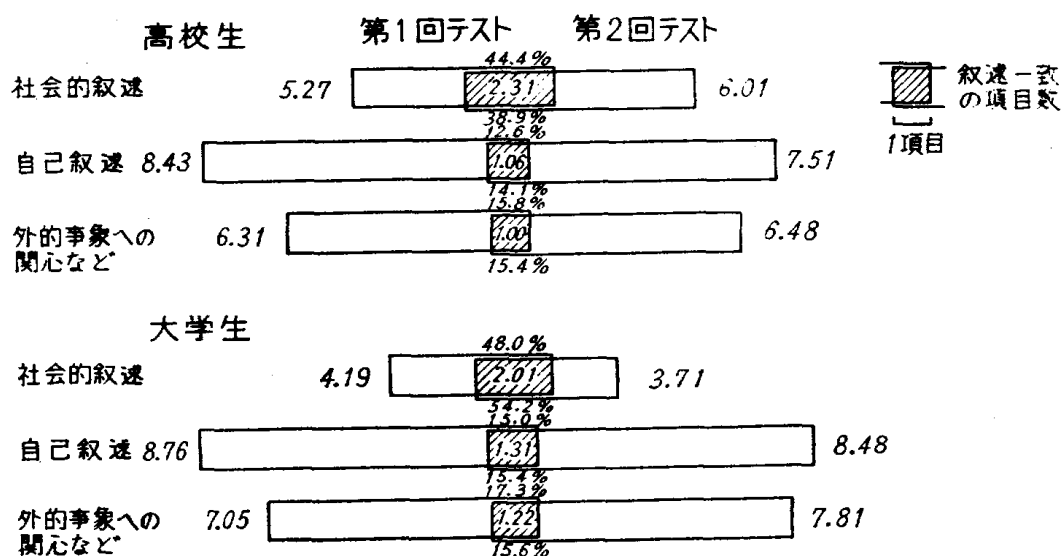
述内容が、どの程度一致しているかを次の2点からみた。ひとつは記述のくり返しであり、他のひとつは表現はかわっても、内容的には同一のものと判定される記述の数である。表5は一致する記述の対の数を示している。高校生では記述がまったく同じようにくり返されるのは20答中4ないし5であり、大学生でも同じように平均して4ないし5であった。これに内容の一致する記述を加えると、いずれのグループでも20答中の約3分の1の記述が非常によく安定していた。

表5 記述反復および内容一致の項目対数及び20答中に占める割合

		高 校 生 (N=35)		大 学 生 (N=29)	
		記 述 反 復	内 容 一 致	記 述 反 復	内 容 一 致
記対 述の 数	平均項目数	4.40	2.24	4.54	2.47
	%	(22.0)	(11.2)	(22.7)	(12.4)
	範 囲	0—9	0—4	0—11	0—6

この安定している記述がどのカテゴリーに多いかを模式的に示したものが図3である。ここでは内容的に一致していた項目は手続上の煩雑さのため省略し、記述がくり返されている項目のみについて三大内容分類の中に占める割合を示している。20答のうち記述が大内容分類（社会的記述：自己記述：外的事象への関心）に入る割合は、テスト施行時期にかかわらず、

図 3 各カテゴリー別にみた記述くり返しの項目数



高校生では 5.5 : 8.0 : 6.5 位の割合であり、大学生では 4.0 : 8.5 : 7.5 位の割合となる。20答の中で、数においては両グループとも自己記述が一番多く、社会的記述はそれに比べて少い。しかし記述一致の項目は社会的記述が一番多く、第1回テストで表明される社会的項目に関する記述の45ないし50%近くの記述は再びくり返されるとみられる。自己記述、外的事象への興味、関心は個々の時点で比較的多く表現されるが、同時に多様性にとんでいる。細かなカテゴリー別にみると、社会的記述の「性」「学生・職業」、自己記述の「特性・態度」が再記述される割合が大きい。

#### 4 考 察

20答法を再テストしたばあいの結果を以上いくつかの点から検討してきたが、はじめにかかげた実験仮説と関連させながらさらに考察してみよう。

##### a. 第1の仮説について

社会的枠組に準拠した記述の先顕性は、この実験では locus score によって示されたが、これは仮説を支持しているものと思われる。このことは、年令、施行期間の違う2つのグループについてともに云うことができ社会的記述は他のいずれの自己に対する記述よりも先行してあらわれている。この点についてはすでに発表されいてる Kuhn らの研究 (22, 23) の結果と一致しており、我が国での星野 (13, 15, 16) による20答法の反応の一般分析ですでに示されている点とも一致する。

また locus score をもって社会的枠組への準拠の程度を示す尺度と考えれば scale type は85ないし90%以上の再現性をもつことが分った。このことから locus score そのものを示すことにより、ある個人が、他の人と比べて社会的枠組への準拠の程度においてどの位に異なった順位を占めるかが一義的に決定しうるものと考えられる。

##### b. 第2の仮説について

2回のテストにおける locus score の代表値は、両グループともに有意差なく、殆ど変化していない。locus score の再現性についても、2回の

テストで変化せず、この仮説も支持されるものと思われる。グループ全体としてみると、一定期間を経ても、客観的な社会的集団や役割に結びついた記述は、その他の自己についての感情的評価的記述よりも20答のはじめの方に表われてくるといえる。また、ある時間の限られたテスト状況で自己に関して比較的自由に表現させると、テストの時点にかかわらず自己記述の内容が、一定の割合に分けられるような側面をもっていることと考え合わせて、それぞれの記述の出現にはある *pattern* があるものとみとめられる。

### c. 第3の仮説について

同一の個人が、2度目のテストで同じ記述を再現するばあいをみると(それは全記述の約3分の1にあたる)、その大半は社会的枠組へと自己を同一化していると考えられる部分であることが結果からわかった。細かい内容からみれば、自己の特性、態度についての評価的な記述が時間的にあまり影響を受けずに出てきている。しかしこの種の記述では、テスト項目があらかじめ調査者によって構成されているものではないので、表明される特性や態度は非常に多岐にわたっている。この点については別の機会にもう少しくわしく分析してみたい。社会的項目に含まれる細かい項目では、それが、客観的な社会的枠組に関連したものであるところから、殆ど同じ内容をともなって再び反応されている。ただし反応の出現順位 (*salience score*) についてはさらに検討する必要がある。

以上3つの仮説に関連して今回得られた結果に考察を加えてきたが、いずれも自己態度の一つの側面の重要性を強調するものであると思われる。

「私」という代名詞によってあらわすことのできる自分は、ある制限を設けられているとはいえ、(註3) 比較的自由的な状況で表現することを促されると、自己に同一化された社会的枠組を契機としてまず自分を位置づけ、

---

註3 考えられる仮説として、被験者の記入すべき反応を無制限に20答より多くしたばあい、「社会的項目よりも、もっと自己の内面や希求についての記述が多くなる」ということがある。これについては、目下その検討を準備中である。

その後、自分自身にしか知られていない自己に対する感情や評価、外的な対象物に対しての関心や期待あるいは思想の面などを記述する。その中で、社会的項目と呼ばれる社会集団や役割に自己を繫留している記述は、他の記述にくらべて安定していると考えられる。これらの社会的枠組自体、もともと客観的なものであり、ある個人のその枠組への準拠は証明し得る事実であるが、この一見、形式的で個人にとっては表層の次元に属するもののように見える社会的標識が、実は個人にとって自己を表現するための基礎的枠組となっていることが考えられる。20答法を用いた他の実験では社会的記述が他の自己自身についての記述よりも、より自我に関与したものとして受けとられていることが実証されている。(1962, 21)

ここで Kuhn (22) も指摘しているように、2つの点について注意しておかなくてはならない。その第1の点は「私は誰だろうか(Who am I?)」という質問を、自分自身に問いかけるものとしてこのテストをうけるように教示しても、実際には、テスターに「あなたは誰ですか」と問われているのと同じ結果になり、社会的関係に繫留した記述が先に出るのではないかということである。第2の点は、私たちの社会生活の特徴として、この種の質問に対しては国勢調査のようなニュアンスを感じさせ、自然に社会的記述が出るのではないかということである。

これらの点については Kuhn と同じく 反応の順序が自己態度の構造を反映していると考えたい。比較的制限のない場面で自己について語らせたとき、何が最初に、それもまったく自発的に出てくるか、おそらく、自然のままの状態で出てくるものは、やはりその個人にとって重要で基礎的な枠組であるのではないだろうか。この実験ではこの考え方が一応支持されたものと思う。

時間的経過に伴う自己態度の安定性については、Kuhn の最近の研究(25)でも扱われていることはすでに述べた。パーソナリティが変化する可能性については、社会的相互作用を重視する立場からみると、従来の“personality-sets-like-plaster”とは別の見かたから考えることができる。

個人が新しい社会的枠組、すなわち、ある個人にとって一つの意味をもつ他者 (significant others) との新しい関係や、新しい準拠集団に入ったり、新しい役割、新しい地位などについたときには、いつでも変化が起りうるのではないかと考えられる。Kuhn は、大学入学という重要な験体が、自己態度を変化させるという仮説を立てて検討している。方法的には、いくつか疑問の余地があるが、一応この仮説が支持された結果が出ている。そのほかに社会的集団に自己態度を繋留している個人は、全体として自己態度の他の側面をも含めて、安定している傾向を見出したことをも記している。

今回の実験で見出したことはわずかであったが、今まであまりふれられていなかった自己態度の一つの面が、比較的安定したものとして存在していることを示唆することができたのではないかと考えている。

#### IV 結論および要約

個人の行動の枠組となっている自己態度の各側面を、20答法を用いて、実験的に研究した。自己態度を単に自己の能力特性についての意識や感情的評価にとどまらず、それより本質的な社会的枠組に繋留しているものを含む全体と考え、その自己態度の社会的な面の時間的経過に伴う安定度を主として検討した。実験結果の要点は次のとおりである。

1 実験の対象には高校生35名大学生29名が選ばれた。これらの対象に対して一定期間 (高校生100日、大学生70日) をおいて2回20答法が施行された。

2 結果として、社会的集団あるいは役割に関係のある自己についての記述の出現は2回のテストで同程度のものであった。これらの記述の出現順序はある一定の予測しうる尺度にあてはまるものとなっていた。

3 自己態度の内容を分類して、3つの側面を比較すると、社会的項目に入る記述は2回目のテストでくり返されることが多く、かつ同じ内容をもってが表現される率が高かった。それに反して、自己の欲求、感情と、その評価はテスト時に種々な反応となって表われ、記述は内容的に多様性にとむものであった。

これらの結果はいずれも実験仮説，すなわち，「社会的役割を内面化し，社会的集団に繋留して表現される自己態度は，個人の自己に対する関心，評価よりも本質的であり，一定期間を経ても，変動せず安定している」とする仮説を支持した。

本研究でとり上げなかった問題としてのこされているのは，反応の叙述そのものだけでなく反応のもつ感情的色彩あるいは意味合いをくみとって自己表現を十分に生かして用いること，反応のさいに働くテスト状況の影響，および，個人行動のモデルにおける自己態度の役割などである。これらについては別の機会に検討を行ないたいと思う。(古沢：本学助手；星野：本学助教授)

#### 参 考 文 献

- (1) Atsumi, Reiko & Hoshino, Akira; The relationships between self-attitudes of children and the adjustment levels as rated by peer group members, *The Japan. Psychol. Res.*, 1962, 4 : 135—138.
- (2) Bills, R. E., Vance, E. L., & McLean, O. S., An index of adjustment and values, *J. consult. Psychol.*, 1951, 15 : 257—261.
- (3) Brownfain, J. J., Stability of the self-concept as a dimension of personality, *J. abnor. soc. Psychol.*, 1952, 47 : 597—606.
- (4) Bugental, J. F. T. & Zelen, S., Investigations into the self-concept: I. The W-A-Y (who are you) technique, *J. pers.*, 1950, 18 : 483—498.
- (5) Bugental, J. F. T. & Gunneng, Evelyn C. Investigations into self concept: II. Stability of reported self-identifications, *J. chin. Psychol.*, 1955, 11 : 41—46.
- (6) Butler, J. M. & Haigh, G. V., Changes in the relation between self-concepts and ideal concepts consequent upon client-centered counseling. In C. R. Rogers & Dymond R. F. ed., *Psychotherapy and personality change*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1954, p. 55—75.
- (7) Combs, A. W. & Snygg, D., *Individual behavior*, Revised ed., New York: Harper, 1959.
- (8) Cooley, C. H., *Human Nature and the Social Order*, New York: Charles Scribner's Sons, 1902.
- (9) Engel, M., The stability of the self-concept in adolescence, *J. abnor.*

- soc. Psychol.*, 1959, 58 : 211—215.
- (10) 福島正治, 村山登, 自己概念の発達的研究, 教心研, 1958, 6 : 1—6.
- (11) Grater, H., Changes in self and other attitudes in a leadership training group, *Personnel Guid. J.*, 1959, 37 : 493—496.
- (12) Grossack, M. M., The “Who am I” test *J. soc. Psychol.*, 1960, 51 : 399—402
- (13) 星野命, 自己態度 (self-attitudes) の比較的研究 (その1) ——一つの方法の検討——日本心理学会第22回大会発表論文集, 1958, p. 324—5.
- (14) 星野命, 自己態度の研究をめぐる2, 3の問題, 輿論科学協会研究紀要, No. 25. 1958.
- (15) 星野命, 自己態度の比較的研究 (その2) 日本教育心理学会第3回総会発表抄録, 1961, p. 42.
- (16) 星野命, 原一雄, 古沢厚子, 渥美冷子, 西村春夫, 自己態度の基礎的研究 日本心理学会第26回大会発表論文集, 1962, p. 281—4.
- (17) 岩原信九郎, 教育と心理のための推計学 (新版), 東京: 日本文化科学社, 1958.
- (18) 加藤隆勝, 自己意識の分析による適応の研究, 心研, 1960, 31 : 53—63.
- (19) 北村晴朗, 心理学に於ける自我の諸概念 (続稿) ——主として客体的自己について——文化, 1959, 23 : 167—194.
- (20) 北村晴朗, 自我の心理, 東京: 誠信書房, 1962.
- (21) 国際基督教大学教育研究所自己態度研究会, 少年の自己態度分析法による非行性の研究, 科学警察研究所報告「防犯少年鑑」 1962, 3 : 145—149.
- (22) Kuhn, Manford H. & McPartland, Thomas S., An empirical investigation of self-attitudes, *Amer. Sociol. Rev.*, 1954, 19 : 68—76.
- (23) Kuhn, M. H., A preliminary atlas of self-attitudes by age, sex and professional training, *Sociol. Quarterly*, 1960, 1 : 39—55.
- (24) Kuhn, M. H., Procedure for content analysis of the TST in five inclusive categories, (*Mimiographed*) State Univ. of Iowa.
- (25) Kuhn, M. H., The relation of critical experiences and of certain characteristics of self-attitudes to subsequent changes in self-attitudes, (*Mimiographed*) State Univ. of Iowa. 1960.
- (26) Lecky, P., Self-consistency: A theory of personality, New York : Island Press, 1945.
- (27) Manis, Melvin, Social interaction and the self concept, *J. abnor. soc. Psychol.*, 1955, 51 : 362—369.



- (28) Manual for the Twenty-Statements Problem, Revised, Jan., 1959, (*Mimioographed*) The Greater Kansas City Mental Health Foundation.
- (29) McPartland, T., & Cumming, J.; Self-conception, social class, and mental health, *Human Organization*, 1959, 17 :
- (30) McPartland, T., Cumming, J. and Garretson, W. S., Self-conception and ward behavior in two psychiatric hospitals, *Sociometry*, 1961, 24 : 111—124.
- (31) Mead, G. H., *Mind, self and society*, Chicago : Univ. of Chicago Press,
- (32) Murphy, G., *Personality: a biosocial approach to origins and structure*, New York : Harper, 1947.
- (33) 長島貞夫, 操作的方による自我の心理学的研究, 野間教育研究所紀要第21集 講談社, 1962.
- (34) Newcomb, T., *Social Psychology*, New York : Dryden Press, 1950.
- (35) Raimy, V. C., Self reference in counseling interviews, *J. consult. Psychol.*, 1948, 12 : 153—163.
- (36) Rogers, C. R., *Client-centered therapy—its current practice, implication, and theory*, Boston : Houghton Mifflin, 1951.
- (37) Rogers, C. R. & Dymond, K. F., *Psychotherapy and personality change*, Chicago : Univ. of Chicago Press, 1954.
- (38) Sarbin, T. R., A preface to a psychological analysis of the self, *Psychol. Rev.*, 1952, 59 : 11—22.
- (39) Sarbin, T. R. Role Theory, in G. Linzey ed., *Handbook of social psychology*, Cambridge : Addison-Wesley, 1952.
- (40) Symonds, P. M., *The ego and the self*, New York : Appleton-century, 1951.
- (41) Taylor, D. M., Changes in the self-concept without psychotherapy, *J. consult. Psychol.*, 1955, 19 : 205—209.
- (42) Torgerson, Warren S., *Theory and methods of scaling*, New York : Gohn Wiley, 1958.
- (43) Wylie, Ruth C., *The self concept, a critical survey of pertinent research literature*, Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1961.
- (44) Young, K., *Personality and problem of adjustment*, London : Routledge & Kegan Paul 1952.

## 20答法回答用紙

下の1から20までのそれぞれの横線の上に、『私は誰だろうか』という問に対して頭に浮んできたことを、20通りのちがった文章にまとめて下さい。

この質問は、あなたが自身に問いかけているもので、他の人からの、あるいは他の人への問ではありません。そのつもりで頭に浮んできた順にりくつや大切さをぬきにして、1から20までの空欄に一つずつ違つたことを書いて下さい。時間が限られているので「はじめ」のあいずがあつたら、なるべく手ばやくかたづけて下さい。質問があつたら手をあげて係の人がそばへ来てからして下さい。いつたん書いた文字を消すには、消しゴムを使わず、鉛筆で文字の上に2, 3本横線を引くだけでよい。

## 『私は誰だろうか』

1. \_\_\_\_\_
2. \_\_\_\_\_
3. \_\_\_\_\_
4. \_\_\_\_\_
5. \_\_\_\_\_
6. \_\_\_\_\_
7. \_\_\_\_\_
8. \_\_\_\_\_
9. \_\_\_\_\_
10. \_\_\_\_\_
11. \_\_\_\_\_
12. \_\_\_\_\_
13. \_\_\_\_\_
14. \_\_\_\_\_
15. \_\_\_\_\_
16. \_\_\_\_\_
17. \_\_\_\_\_
18. \_\_\_\_\_
19. \_\_\_\_\_
20. \_\_\_\_\_

それぞれの答のコトバや文章の中で、自分が一番重要と思われる単語の下には横線をひいて下さい。

## Stability of the Self-Attitudes

(English Résumé)

Atsuko Furusawa and Akira Hoshino

The self-attitudes are defined in this article as a psychological set in an individual inferred through both aspects of self-consciousness; personal self-evaluations of his own abilities, traits, interests and objects of interest, and of self-identifications to social systems and roles. The concept of the attitudes has been emerged from thoughts of the so-called social interactionists, such as G. H. Mead, G. Murphy, T. R. Sarbin and Newcomb. They have laid an emphasis upon the social formation of the attitudes, that basis of the self-attitudes is generalized and internalized others' attitudes toward an individual.

The Twenty Statements Test, devised by H. H. Kuhn and T. MacPartland in the U. S., is used for the present study in order to obtain the self-descriptions of one's attitudes toward himself.

The hypothesis tested in the present study is as follows:  
Social and objective aspects of the self-attitudes are more essential than personal and subjective aspects, and are stable through the passage of time.

To test the above hypothesis, thirty-five high school students and twenty-nine college students were administered the T. S. T. twice. The intervals of the tests were 100 days for the high school students and 70 days for the college students. The consensual statements which were the statements self-anchored at social systems and roles preceded to any other self-referent statements with both groups and in both testings.

The correlation coefficients between test-retest locus scores which

are index of social anchorage, were .59 with the high school students and .38 with the college students. There was a tendency of reproducing the statements with the same proportion among three (social, self-evaluative, and object-cathexised) categories ; 5.5 : 8.0 : 6.5 with high school students and 4.0 : 8.5 : 7.5 with the college students respectively. And nearly half of socially anchored statements were repeated in the second testing to both groups whereas self-evaluative and object-cathexised statements varied from time to time.

These findings indicate the experimental hypothesis to be accepted and add another evidence (to show) that the social aspect of self-attitudes is more essential and stable than the other aspects, to the Kuhn's finding that social anchorage proved to be highly associated with change in self-attitudes.